

令和2年度「学術変革領域研究（A）」新規採択研究領域
に係る研究概要・審査結果の所見

領域番号	20A102	領域略称名	土器を掘る
研究領域名	土器を掘る：22世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究		
領域代表者名 (所属等)	小畑 弘己 (熊本大学・大学院人文社会科学研究所 (文)・教授)		

(応募領域の研究概要)

「いつまで答えの出ない議論を続けるのか」。縄文の焼畑農耕を論じた照葉樹林文化論から50年が経過した現在、考古学が未だにイネの伝来時期さえ決定できないという「限界」は、農耕に関する高確度の情報を時・空間で整理し俯瞰できる手法がないことに起因する。本領域では日本全国の土器を対象に、X線を使い土器内外の種実・害虫圧痕を始めとする生物情報を「悉皆的」に集め、最新の年代測定法で時・空間列に再配置する。そしてそれら情報をAIやX線工学技術を用い俯瞰・分析することで、我が国の植物栽培や農耕化の正確な時期とそれに伴う生活様式や精神性の変化を解明する理論を体系化する。これにより、考古学の限界に突破口をもたらす世界展開可能な未来型の考古資料学「土器総合分析学」を創出する。

(審査結果の所見)

本研究領域は、土器という人類史において広汎に存在する資料を用い、考古学・生物学・分析化学の融合によって、その内部に包摂された情報を抽出し、農耕文化の開始に関わる新たな人類史像を描く研究方法を見いだそうとする独創的な研究と評価できる。日本国内の多くの機関との連携が取られ、研究組織は充実し、多分野の有機的な協力によって目的を達成する研究計画が立てられており、発掘調査が綿密に行われている日本の強みを活かした研究方法として、今後の国内外での展開も期待できる。

一方で、「農耕化は人類に何をもたらしたのか」というテーマに挑むためには、日本列島の土器、特に縄文土器を軸とする研究だけでは不十分であり、対象の拡大、更なる方法論の提示が望まれる。また、日本発の研究の優位性をうたう本研究は、研究成果の国際的発信や研究連携も積極的に行うことが望ましい。